

## 日本腎臓学会の課題：アジア重視の戦略を

日本学術会議会長、東京大学先端科学技術研究センター客員教授  
東海大学非常勤教授、元国際腎臓学会理事長、元日本腎臓学会理事長

黒川 清

冷戦終了後の21世紀は、9/11テロ事件をきっかけに世界の動向が揺れ動き始めた。日本は15年前には「ジャパンアズナンバーワン」といわれていたのに、10年余の経済低迷を続け、「鉄のトライアングル」をめぐるスキャンダルが続出し、国立大学、国立病院の独立行政法人化を迎えた。日本の学界も、世界の学術も急速に変わりつつある。20世紀は第1、第2次世界大戦、冷戦と世界戦争が続き、科学と科学技術の急速の進歩、医学医療の進歩が特徴であろう。この100年で世界はすっかり変わった。20世紀に世界人口は16億から60億に増え、環境問題は悪化の一途である一方で、地球は狭くなり、情報は瞬時に世界を駆け巡り、「南北格差」は広がった。人類社会は持続可能なのか。これが21世紀の世界を動かす地球規模の潮流なのである。これからの日本の課題は何か。規格大量生産工業経済社会は終焉し、21世紀の世界を動かすパラダイムではないのである。

現在の世界人口の80%は低開発国と発展途上国にあり、60%はアジアである。100年前の日露戦争に勝利した日本は、初めて欧米の文明と帝国主義から独立しえた国なのに、日本自身が普遍的価値を提供できずに帝国主義的にアジアで振る舞った。だからこそ日本の課題はアジアとの関係を修復しつつ、アジアでの独自の立場を確立する事であろう。欧米との関係にも考慮が必要だ。アジアで信頼されない日本を世界の誰が信頼するだろう。ではどうするか。

学術、医学には国境がない。だからこそアジアとの関係再構築に絶好のツールなのである。欧米ばかり見ている、アジアに信頼されない日本は欧米からも信頼されるはずがない。多くのリーダー的立場にある人が、自分の「国内的」権威の維持などという「内向き」の情けない行動である。次世代を育てるといふ本来の社会的ミッションを果たすべきである。これはすぐれて「リーダー」の見識と志の問題なのである。

腎臓領域では国際腎臓学会が他分野の国際学会に先駆けて途上国の人材育成へとその目標をシフトしているのは、まことに当を得た政策転換である。国は、政府は、企業は、大学は、科学者は、医学界は、では腎臓学会はどうだろうか。欧米ばかり向いていても、アジアに信頼されない限り、日本は利用されるだけで国際社会からの信頼も失われる。さもないと将来は暗い。これが日本腎臓学会の21世紀の課題だろう。2005年6月(26～30日)には国際腎臓学会が8年ぶりにアジアで開催される。前回のシドニーでの参加者を越えた日本からのシンガポールへの参加が期待されている。これがアジアの友人、隣人達の願いであり、期待なのだ。アジアに行ってみると日本への期待はきわめて大きいことを感じるはずである。